平成29年10月1日発行
第 2号

じょうけい

真宗大谷派 至徳山 浄慶寺

お寺にもっと近づいて見ませんか
新たな近づきがあるかも知れません
お寺にもっと目を向けてみませんか
親鸞聖人の教えが見えてくるかも知れません
お寺にもっと触れ合ってみませんか
心が穏やかな安らぎに触れるかも知れません

11月18日(土)・19日(日)は、報恩講です。どうぞ本堂にご参詣ください。

報恩講の意味するところ

浄慶寺住職　大塚 展彦

京都、東本願寺の大学で学んでいる時にお世話になった老先生は講義の合間に何度も同じ話をされました。それは、『歌にもありますよね。仰げば尊しです。その人を思うと、いつまで経っても頭が上がらない。未熟で稚拙な自身が胸中に現出して、我が身が恥ずかしくてしようがなくなる。現在の立場では、何かと威勢を張る自分がいるけれども、あの人の事を思うと、今でも、ただ冷や汗が流れるばかり。仰ぐほかない。なぜ、こうした恥ずべき自分にあそこまで親身になっていただいたのだろうかと思うと涙が止まらない。そこに師ということがある。そこに恩ということを知る。そして、はじめて、我が身は、生涯を通して、弟子の身であることを知る。君たちは、そうした人と出遇いましたか？そうした人と出遇った人は、いつまでも青年です。年齢は老人となっても青年の心を持ち続ける。人生の完全燃焼を遂げる人となる。それを涅槃という。もはや、浄土に行こうが行くまいがもうそんなことは、人生の問題でなくなる。現在、ただ今、自身は、弟子としてこの道を全力で歩む。往生とは、このような精神の内面世界を表現しているのです』と、いう話です。

秋のお彼岸が過ぎますと、親鸞聖人の祥月命日を機縁として、本山京都東本願寺をはじめてとして、全国各地の真宗寺院では、報恩講を勤めます。源氏と平氏との戦乱から長く続いた大混乱の時代に90年の人生を生きた親鸞聖人は、生涯、師である法然上人との出遇いを忘れることはありませんでした。

報恩講の「報」という字には、(恩に報いる)という意味と、(恩を知る)という意味があります。

恩を知るということは、どれだけ時間が経っても出遇った感動がよみがえる。また、その人との新たな出遇いを感じるという意味があります。

言葉通りに学校で教えていただいた先生をはじめ、私たちの人生の中では、自分というものをお育ていただいた方が沢山あります。そして、それは、共に暮らす、目の前の家族の一人でもあります。

しかし、私たちは、なかなか、その人のことを「仰ぐ」ことができません。

浄慶寺には、様々な年間行事がありますが、私自身をここまでお育ていただいた方を振り返る時間と場所を共にしませんか。

（※親鸞聖人の入滅については、3面をご参照ください）